

北村実著『事実と価値』（本の泉社、二〇一七年）

東京唯物論研究会編『唯物論』第92号、2018年11月

評者： 島崎 隆

本書は三部構成となっており、第一部「価値とは何か」は、事実認識との対比で、そもそも価値（判断）とは何かについて哲学者たちの議論を紹介しつつ展開する。分析哲学者のムーア（「自然主義的誤謬」の議論で有名）、新カント派、見田宗介、旧東独のハーンらの議論を紹介しつつ、価値は事実認識とは異なり、一定の関心・欲求にもとづく評価の主体なしには存在しないと強調される。だから、価値評価は主体－客体の関係においてのみ生ずるとされる。価値とは、「よい、悪い」というような評価であり、個人や集団で異なるものである。牛はヒンズー教徒にとって「神聖さ」の価値をもつが、ある異教徒にとっては単に食物という価値をもつ。企業のリストラは経営者にとっては「望ましい」という価値をもつが、労働者側からすると、「望ましくない」ものである。だから価値は、主体の評価によって定まるので、客観的に最初から存在するわけではない。これが著者の強調する点である。この点で、著者が緻密に価値意識の構造について図式化することは、興味深い（二二頁）。第二部「価値と文化」は、価値形成との関連で、文化、文明とは何かを多くの論者を紹介しつつ展開し、結局、文化を「価値の体系」と「技術の体系」の複合的構成体であると結論する。このさい、どちらかというところ、「文明」は技術の体系として累積的、客観的であり、「文化」は価値の体系として、規範的、非累積的、主観的であると特徴づけられる。ここでのまとめはわかりやすく、説得的だった。続いて、従来のマルクス主義の反映論との関係で、芸術的価値とは何かも議論される。そのなかで、ロダンのバルザック像の芸術的創造の議論や、マルクス、エンゲルスの芸術批評についての議論は、評者がほとんど知らなかったもので、おおいに勉強となった。

第三部「価値と科学・技術」では、二〇一一年の福島原発事故を大きなトピックとして、「真理に奉仕する科学」の時代から、科学・技術が資本に奉仕する「産業化科学」（ラベッツの主張）へと転化したという状況認識を踏まえて、科学者、技術者の社会的責任が厳しく問われる。『国会事故調・報告書』の詳細な紹介は、当時をリアルに思い出させ、印象的であった。こうしていまや、学会などは「倫理綱領」を定めることが多いとされる。注目すべきことは、ウラン原子核などの研究はいわゆる純粋科学に属するかもしれないが、それでも原爆・原発への利用の是非がただちに問題となり、研究の価値中立性が疑問視されるという事態の指摘である。著者は結論として、「研究の価値中立」の見地を保持しつつ、獲得した「事実」にたいして、誠実に「価値判断」の表明をおこなっていくべきだと

述べる。

本書は全体としてすっきりしたわかりやすい叙述であり、哲学書にありがちな難解で晦渋なところはほとんどない。哲学研究者のみならず、ものごとを原理的に考えたいという科学者、技術者、非専門家の方たちにも是非一読を勧めたい。評者もおおいに勉強させていただいた。ところで本書では、評者も個人的によく知る何人かの論者が明快に批判されている。本書の展開のなかでさらにいくつもの問題点が発生していると思われるので、事柄の真理をさらに解明するという目的で、積極的かつ丁寧に反論を試みていただきたいと考える。著者が曖昧な妥協をせずに、問題を実感して批判されたことには、敬意を表したいと思う。「まえがき」では、岩佐茂氏が、価値が価値評価に先立つという氏の主張にたいして、価値評価抜きに価値は実にはありえないという著者の強調点に従って、批判されている。さらに鰻坂真氏も、「俗流唯物論」の疑いありとして批判的に言及されているが、たしかに氏は、本文で数カ所具体的に批判される。また牧野広義氏も、価値とは、自然や社会の事物が人間の生存や生活、自己実現にとってもっている必要性や有用性であり、実践とは関わるが、意識には依存しない、と定義する点で批判される。著者によれば、こうした「客観的価値説」は主体-客体の関係を考慮しないので、不適切なのである。

鰻坂氏にたいしては、事実認識と価値評価の間には絶対的壁はなく、両者は絡み合い相互に移行する、事実認識はある意味で価値判断を覚醒させる、などという氏の主張が、両判断を峻別する著者から厳しく批判される（一三七頁）。第三部第四章でも鰻坂氏が詳細に批判されており、続いて見田石介の主張（「もっとも客観的なもっとも深い事実判断は、つねに価値判断なのである」）が同様の趣旨で批判される。ここでは議論の作法が、すなわち民主主義的対話のあり方が問題となっているだろう。もはや紙幅がないが、評者は著者の主張する価値評価の主体を前提としつつも、一定の理論的展開をすれば、鰻坂氏や牧野氏の主張を是認することが可能だという気がする。さらに別の疑問であるが、著者は評価主体をつねに人間と考えていると思われる。だが、それでは狭すぎるのではないか。というのも、主体-客体関係は生命であれば、その程度の差はあっても、主体として周囲世界を環境として設定しなおし、それを意識的にはないが（意識をもつのは人間、せいぜい高等哺乳類のみ）行動を通して、確実に対象に価値評価を下しているといえよう。食物となるものはプラスの価値をもつものであり、外敵はマイナスの価値をもつ…。ともあれ、本書を契機に価値に関する議論が活発におこなわれることを望みたい。（しまぎ たかし・本会会員）